

## 村上春樹作品における<関西弁>の英語翻訳について

山木戸浩子

(藤女子大学)

*Abstract: The English translation of the Kansai dialect in Haruki Murakami's novels and short stories*

*This paper explores how regional dialects (hereafter, "dialects") in literary works are handled in translation. With their power to convey distinctiveness in language and setting, dialects can be useful in portraying individual characters; however, it is this very particularity, whether geographical, cultural or social, that makes the treatment of dialects one of the most challenging aspects of translation. To study this problem, I examined, as a case study, the English translations of several examples of speech in Kansai dialect from novels and short stories by Haruki Murakami. While the dialects in question are typically rendered into Standard American English, I discuss the ways in which the translators try to compensate for what is lost from the original.*

### 1. はじめに

フィクションにおいて、登場人物の会話に地域変種(方言<sup>1</sup>)が使用されていることがある。読者は特定の地域変種による会話を受け入れ、その人物がその変種と結びつく地域の出身であると理解するが、会話における地域変種の使用は(会話の内容や地の文における描写と合わせて)物語の地域性を表す重要な要素となっている。本稿は、日本語で書かれた小説などの文学作品が他言語に翻訳される時、地域変種の会話はどのように対応されるのかについて探求することを目的とする。日本語には、地域変種や社会変種など、言語変種が数多く存在し、フィクションの作り手は登場人物のキャラクター形成のために、その人物の話し言葉に言語変種を意図的に使用することがある。金水(2003)は、「ある特定の言葉づかい(語彙・語法・言い回し・イントネーション等)を聞くと特定の人物像(年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等)を思い浮かべることができる時、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができる時」、その言葉づかいを「役割語」と呼んでいるが(p. 205)、

---

YAMAKIDO Hiroko, "The English translation of the Kansai dialect in Haruki Murakami's novels and short stories," *Invitation to Interpreting and Translation Studies*, No.22, 2020. pages 25-45. ©by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

フィクションの台詞に役割語を使用すると、その「話し手の属性を受け手にただちに伝えられる…」(金水 2016, p. 5)という利点がある。例えば、ある登場人物が「そうじゃ、わしが知っておる」と言えば、話し手として「老人」が想定され、その人物像に結びつける言葉づかい(具体的には、一人称代名詞の「ワシ」、断定の「だ」「である」に相当する「ジャ」、「いる」と同義の「オル」)は役割語とみなされる。「老人」と結びつけられる言葉づかいは「老人語」と呼ばれ、本稿では、金水(2003, 2014)に倣い、こういった役割語のラベルを山カッコに括って示す<sup>2, 3</sup>。

「地域変種」は、話し手の特定の人物像の中でも特に「居住地域」(あるいは出身地)との結びつきが自然に理解される特徴的な言葉づかいのひとつである。金水(2016)によると、フィクションにおいて、ある登場人物の会話に特定の地域変種(「方言」)が使用されるとき、その人物が単にその地域に居住している(あるいはその地域の出身である)というだけではなく、「その場面が特定の地方であることを示したり、その話者が、その方言によって示される地方の人物のステレオタイプを持っていることを表すかのどちらかが典型である」と言う(p. 10)。またその人物は、作品の中であまり重要な役を持っていないことが多く、一方で主人公は「地方の出身であってもあまり強い方言を用いず、むしろ標準語を用いることが多い」傾向にあると言う。その理由として、「台詞の分かりやすさ」と「受け手の自己同一化を容易にするため」の2点を挙げている。これを「役割語セオリー」と呼ぶ(ibid.; 金水 2003, 金水・田中・岡室(編) 2014 も参照)。

このように、ある登場人物による特定の地域変種の使用は、その人物のキャラクター形成や場面の理解へとつながる重要な役割を担っているのであるが、日本語で書かれた文学作品が他言語に翻訳されるとき、地域変種による会話はどのように対応されるのであろうか。地域変種はある特定の地域と結びつく言葉であり、例えば日本で話されている地域変種はそれぞれ日本の異なる地域と結びつき、アメリカで話されている地域変種はそれぞれアメリカの異なる地域と結びつく。したがって、ある特定の地域変種で書かれた会話が他言語に翻訳された時点で、話し言葉がそれ自体で持っていた特定の地域との結びつきを失ってしまうのは避けられない。もしそうであれば、翻訳者はどのようにその補整を行うのか(あるいは行わないのか)。実際にこれまで、地域変種など、「言語変種をどう訳出するかは、実践においては大きな困難を」伴うと言われてきた(吉田・坪井 2013)。しかしながら、フィクションの中で話し言葉に使用される「役割語」としての非標準変種の翻訳に関する研究は少ないというのが現状である(山木戸 2018 も参照)。それでは、地域変種の翻訳にはどのような方法を探る可能性が考えられるのかと言うと、平子(1999)は「方言の翻訳では、たとえばミュンヘンやウィーンのドイツ語は、ベルリンやハンブルクのドイツ語に対して、日本でいえば関西弁が関東弁に対する関係であるとみなし、ウィーン子のせりふを大阪弁で訳すというような工夫も面白いだろう。方言のもっている言語的価値を考えて、等価の対応物を工夫するのである」(p. 75)と提案する。一方で、Colina(2015)は、登場人物のキャラクター形成に関わる地域変種を翻訳する際に起こりうる問題について、以下のように述べている。

翻訳者によっては、目標言語の中に類似の内包的意味を持つ方言(dialect)を見つけようとするが、別の地域社会で話されている別の方言によって再現することはほぼ不可能である。それぞれの社会・文化も異なるため、ある言語における有標の方言を別の言語における有標の方言に翻訳すると、ほとんどの場合、もともと含まれていた意味は失われるか影響を受ける。したがって、原著で意図された効果を得るためには何らかの補整が必要となる。そもそも、「読む」という行為は、読者が現実の世界に関する知識を使って行われる過程である。ある特定の方言が持つ社会的意味に関して原著の読者が持っている知識や世界観は、目標言語の読者のものとは異なるのである(p. 194)。

もし Colina (2015) の分析が正しいのであれば、日本語で書かれた小説などの文学作品の翻訳においても、地域変種による会話の訳出には目標言語において有標の特定の地域変種ではなく、無標の標準語が使用されるべきであるが、実際はどうか。その場合、原著においてある登場人物が「特定の地域変種で話している」という情報は目標言語の読者に伝えられないままになってしまうのか。あるいは、翻訳者によっては何らかの補整を試みるのか。一方で、作品の中には、平子(1999)が提案するように、翻訳者の裁量で、目標言語において原著に使用された地域変種の「言語的価値」に近い地域変種が使用されることもあるのか。

本稿は、原著における地域変種の会話が翻訳ではどのように対応されるのかを探るために、ケーススタディとして、村上春樹によって書かれた小説(長編、短編のどちらも)に登場し、関西地方で話されている地域変種を話す人物の会話が英語翻訳版でどのように訳出されているかを考察する。これ以降は、金水(2003)に従い、話し手として関西出身者が想定されるような特定の言葉づかいを〈関西弁〉、他の役割語の基準となるような、特徴的な人物像を持つ話し手がもっとも想定されにくい言葉づかいを〈標準語〉と呼ぶことにする。村上氏の小説の中で、〈関西弁〉を話す登場人物が存在し、英語翻訳が出版されているのは全部で 6 作品で(「アイロンのある風景」2000、『海辺のカフカ』2002、『アフターダーク』2004、「イエスタデイ」2014、「クリーム」2018、「ウィズ・ザ・ビートルズ With the Beatles」2019)(2020年9月22日現在)、〈関西弁〉話者の登場人物は計 7 名である。本稿では、この 7 名全員の話し言葉を分析の対象とする 4。

## 2. 分析対象の登場人物の紹介

村上春樹氏は 1949 年に京都市で生まれ、1968 年に大学で東京に出るまで兵庫県(西宮市と芦屋市)で育った(洋泉社編集部(編) 2013)。「僕は関西生まれの関西育ちである。父親は京都の坊主の息子で母親は船場の商家の娘だから、まず百パーセントの関西種と言ってもいいだろう。だから当然のことながら関西弁をつかって暮らしてきた。」(村上 1986, p. 22)と述べていることからわかるように、関西方言が生育地方言である。

村上氏はこれまで、関西出身の人物が登場したり、物語の舞台として関西地方が設定されている小説を複数書いているが、必ずしも登場人物が全員＜関西弁＞を話すわけではない。それでは、分析の対象となる 7 名の＜関西弁＞話者はどのような作品に登場し、どのような人物なのか。(表 1)に簡単にまとめる。(『海辺のカフカ』に登場する「大阪からやってきた中年の夫婦」は 2 名と数える。)

(表 1) ＜関西弁＞話者が登場する村上春樹作品と英語翻訳

作品名 (英語翻訳版の title)	出版 年	(英語版翻訳 者)	名前・役名 (性別, 出身 地)	登場の 場面
アイロンのある風景	2000		三宅さん	茨城県
Landscape with flatiron	2003	Jay Rubin	(男性, 神戸)	鹿島灘
海辺のカフカ*	2002		大阪からやっ てきた中年の 夫婦	香川県
<i>Kafka on the Shore</i>	2005	Philip Gabriel		高松
アフターダーク*	2004		コオロギ	東京
<i>After Dark</i>	2008	Jay Rubin	(女性, 大阪)	
イエスタデイ	2014		木樽 <sup>きたる</sup>	東京
Yesterday	2017	Philip Gabriel	(男性, 東京)	
クリーム	2018		老人	神戸
Cream	2019	Philip Gabriel	(男性, 神戸?)	
ウィズ・ザ・ビートルズ	2019		彼女のお兄さ ん	神戸
With the Beatles	2020	Philip Gabriel	(男性, 神戸)	

(\*: 長編小説、それ以外は短編小説)

「イエスタデイ」の「木樽<sup>きたる</sup>」を除く 6 名は関西の出身であることから、彼らが＜関西弁＞を話すのは自然である。(なぜ東京出身の「木樽」が＜関西弁＞を話すのかについては後に説明する)。一方で、彼らが登場する場面は、関西地方に限らず、東京もあれば、その他の地方もある。また、彼らの物語における役の重要度はそれぞれ異なるが、全員主役ではない。例えば、「イエスタデイ」「クリーム」「ウィズ・ザ・ビートルズ With the Beatles」(これ以降、「ウィズ・ザ・ビートルズ」と略す)の主人公はそれぞれ関西出身の設定である

ものの、皆〈標準語〉を話す。「役割語セオリー」に従っているのである。

上にも述べたように、著者の村上氏は関西弁が生育地方言であり、実際にこれらの 7 名による〈関西弁〉の発話はどれも本物で、自然であると言う(金水敏氏、大阪府出身、2018年7月2日、2020年9月21日私信;ただし、「ウィズ・ザ・ビートルズ」の「彼女のお兄さん」の〈関西弁〉については、「まあまあ自然だが、やや標準語的。その方がリアルと言えなくもない」とのことである。)以下(1)-(3)に彼らの〈関西弁〉の発話の例をいくつか紹介する。〈関西弁〉の語彙や語法に下線を引く。これ以降も同様である。

- (1) 三宅さん(男性、神戸出身) (「アイロンのある風景」, 場面: 茨城県鹿島灘)
- a. 「今、浜にいるねんけどな、流木がけっこうぎょうさんあるねん。大きいやつができるで。出てこれるか？」 (村上 2000, p. 69)
- b. 「さあ、ようわからん。俺な、あっちとはもう関係ないねん。昔のことや」 (p. 47)
- (2) コオロギ(女性、大阪出身) (『アフターダーク』, 場面: 東京)
- a. 「すみません。本名は捨てましてん」 (村上 2004, p. 52)
- b. 「えらいむずかしい顔して」 (p. 96)
- c. 「カオルさん、生まれる時代をちょっと間違えはつたんですわ」 (p. 97)
- (3) 老人(男性、神戸出身?) (「クリーム」, 場面: 神戸)
- 「ああ、もちろんや。あたりまえのことや。学校ではそんなことは教えてくれへんからな。ほんまに大事なことはな、学校なんかではまず教えてくれんのや。きみも知ってのとおり」 (村上 2018, pp. 33-34)

(1)-(3)における〈関西弁〉として、語彙は「ギョーサン」(cf. 「たくさん」)、さらに以下必要に応じて〈関西弁〉の語彙・語法の項目にそれぞれ相当する〈標準語〉を(cf. 「」)として示していくが、「エライ」(cf. 「すごく」)、「ホンマ」(cf. 「本当」)、語法は「ネン」(cf. 「のだ」)、「デ」(cf. 「よ」「ぞ」)、「(打消)ン」、「(断定)ヤ」、「(過去の断定)テン」、「(尊敬)ハル」、「(打消)ヘン」、丁寧体「です」に続く終助詞「ワ」、標準語の「よく」にあたる「ヨー」などが観察される。これらの語彙・語法のうち、「ギョーサン」「テン」「ワ」「ヨー」以外は全て金水(編)(2014)『〈役割語〉小辞典』に見出し語として載っており、〈関西弁〉としての使用が確認される<sup>5</sup>。

次に、これらの 7 名の〈関西弁〉話者が関西人のステレオタイプを持っているのかどうかについて考える。金水(2003)は、フィクションに登場する〈大阪弁・関西弁〉を話す人物、つまり「大阪人・関西人」のキャラクターに期待される性質として、「1. 冗談好き、笑わせ好き、おしゃべり好き」「2. けち、守銭奴、拝金主義者」「3. 食通、食いしん坊」「4. 派手好き」「5. 好色、下品」「6. ど根性(逆境に強く、エネルギーにそれを乗り越えていく)」「7. やくざ、暴力団、怖い」の 7 つを挙げており(pp. 82-83)、「物語の中で〈大

阪弁・関西弁を話す人物がいたら、[これら]の特徴のどれかひとつ、あるいは 2 つ以上の特徴を持っていると考えてほぼ間違いない」(p. 83)と言う。この 7 名の〈関西弁〉話者全員がおそらく「1. 冗談好き、笑わせ好き、おしゃべり好き」の特徴を持つ人物として描かれている。また、『海辺のカフカ』の「大阪からやってきた中年の夫婦」は、「2. けち、守銭奴、拝金主義者」の特徴も持っている(金水 2018, p. 75)。登場の場面は香川県高松であるが、物語を通して唯一の「方言」の話者である。彼らは高松市郊外にある「甲村図書館」という「旧家のお金持ちが自宅の書庫を改装してつくった私立図書館」(村上 2002, p. 57)を訪れており、そのツアーの中で「かつて甲村図書館を訪れた山頭火が残っていた作品がすべて廃棄」されたと聞き(金水 2018, p. 75)、以下(4)のように反応をする<sup>6</sup>。

(4) 大阪からやってきた中年の夫婦 (『海辺のカフカ』, 場面: 香川県高松)

「そら、もったいないことしましたな」と大阪から来た奥さんが本当に悔しそうに言った。「山頭火、今やったらもうえらいお値打ちですのにねえ」

「おっしゃるとおりですね。でも当時の山頭火はまったく無名の存在でしたから、やむを得ないことかもしれません。あとになってみないとわからないこともたくさんあります」と佐伯さんはにこやかに言った。

「ほんまに、ほんまに」と夫は相づちを打った。 (村上 2002, p. 69)

金水(2018)は、「典型的な大阪弁キャラクターの発話内容であり、この部分に限って大阪弁を使わせたのは、大阪弁ステレオタイプの露骨な利用であり、典型的な役割語であると言える」(p. 75)と指摘する。彼らは 1 回きりの登場で、名前も現れない典型的な脇役であるが、少ない会話を通して彼らのキャラクターが強く印象づけられていると言えよう。〈関西弁〉が役割語として効果的に使われているのである。

最後に、「イエスタデイ」に登場する「木樽<sup>きたる</sup>」による〈関西弁〉の使用について説明する。彼は生まれも育ちも東京であるのにも拘らず、「ほぼ完璧なく関西弁を話す」という設定である。阪神タイガースの熱狂的なファンであり、ファンと交流をするためには〈関西弁〉が必要であると感じ、高校の夏休みに大阪の天王寺区にホームステイまでして、「後天的に」〈関西弁〉を習得したと言う(pp. 69-70)。(5)に例を示す<sup>7</sup>。

(5) 木樽(男性, 東京出身) (「イエスタデイ」, 場面: 東京)

a. 「ちゃうちゃう。生まれも育ちも田園調布や」 (村上 2014, p. 69)

b. 「そうや。それくらいおれにとっては、阪神タイガースがすべてやったんや。それ以来、学校でも家でもいっさい関西弁しかしゃべらんことにしてる。寝言かて関西弁や」と木樽は言った。「どや、おれの関西弁はほぼ完璧やろ？」 (p. 70)

木樽が話す〈関西弁〉は「(文字で見るとは)とても自然である」ものの(金水敏氏,

2018年7月2日私信)、彼は関西で生まれ育ったわけではない。それでは、木樽のキャラクター形成において、〈関西弁〉は一体どのように使われているのか。近年、例えば、「関西人でもないのに『なんでやねん！』と〈関西弁〉で『つつこむ』』といったような「方言コスプレ」の現象が観察されると言う(田中 2011, pp. 2-3)。「方言コスプレ」とは、「話し手自身が本来身につけている生まれ育った土地の『方言』(生育地方言)とは関わりなく、日本語社会で生活する人々の頭の中にあるイメージとしての『〇〇方言』を、その場で演出しようとするキャラクター、雰囲気、内容にあわせて臨時的に着脱する」(ibid., p. 3)行為であるが、小説などにおいても登場人物が会話の中で生育地方言ではない「方言」を使用し、「ニセ方言キャラ」を形成することがある。木樽も〈関西弁〉を話すことによって、「ニセ方言キャラ」が形成されているのである(金水・田中 2019)。

### 3. 分析

それでは、これまでに見てきた7名の〈関西弁〉話者の会話は、英語翻訳版でどのように対応されているのだろうか。考察のポイントとなるのは、以下(i)-(iii)の3点である。

- i. 〈関西弁〉の会話は、英語の標準変種に翻訳されるのか。あるいは、英語の非標準変種が投影されているのか。
- ii. 英語の標準変種に翻訳されている場合  
原著においては(〈標準語〉ではなく)〈関西弁〉が使用されているという情報は英語翻訳版の読者に伝えられるのか。もし伝えられるのであれば、それにはどのような方法が採られているのか。
- iii. 英語の非標準変種に翻訳されている場合  
それは英語のどの非標準変種なのか。また、その非標準変種は、〈関西弁〉に類似する「言語的価値」を持っているために選択されているのか。

このポイントを軸に7名の〈関西弁〉話者の会話をそれぞれ見ていくと、全て〈標準アメリカ英語〉に翻訳されており、したがって、英語の非標準変種が投影されたケース(上のiii.に該当)はなく、その上でさらに以下の3つのタイプに分かれることがわかる。

- タイプ1 ・ 〈関西弁〉の会話は、〈標準アメリカ英語〉に翻訳されている。
  - ・ 英語翻訳版の読者には、その人物が〈関西弁〉(あるいは非標準変種)で話すという情報は伝えられない。
- タイプ2 ・ 〈関西弁〉の会話は、〈標準アメリカ英語〉に翻訳されている。
  - ・ 英語翻訳版の読者に、その人物が〈関西弁〉で話すという情報は地の文で示され、それは原著の地の文にそう書かれていたのがそのまま英語に翻訳されたためである。
- タイプ3 ・ 〈関西弁〉の会話は、〈標準アメリカ英語〉に翻訳されている。

- ・ 英語翻訳版の読者に、その人物が〈関西弁〉で話すという情報は地の文に示され、それは翻訳者の判断によって「～方言で言う」といった内容が加筆されたためである。

以下でタイプ別に英語翻訳された会話の例を見ていくこととする。翻訳者の判断によって「〈関西弁〉で話す」という情報が加筆される際、その人物の最初の発話の後の地の文(あるいはその近く)である場合が多いため、必要に応じて地の文も含めることとする。

### 3.1 タイプ 1

タイプ 1 では、〈関西弁〉の会話が〈標準アメリカ英語〉に翻訳され、英語翻訳版の読者にその人物が〈関西弁〉(あるいは非標準変種)で話すという情報は伝えられない。「大阪からやってきた中年の夫婦」、「老人」、「彼女のお兄さん」の 4 名の会話の翻訳がこれにあてはまる。まず、(6)の「大阪からやってきた中年の夫婦」の会話とその英語翻訳から見ていこう。(〈関西弁〉の会話とそれに対応する英語翻訳は**太字**で示す。)

- (6) 大阪からやってきた中年の夫婦 (『海辺のカフカ』, 場面: 香川県高松)

“a middle-aged couple from Osaka” (*Kafka on the Shore*)

「そら、もったいないことしましたな」と大阪から来た奥さんが本当に悔しそうに言った。「山頭火、今やったらもうえらいお値打ちですのにねえ」

(中略)

「ほんまに、ほんまに」と夫は相づちを打った。 (村上 2002, p. 69)

“**What a terrible waste,**” the lady from Osaka says, apparently truly sorry to hear this. “**Nowadays Santoka fetches a hefty price.**”

[...]

“**You got that right,**” the husband pipes in.

(Murakami 2005, Gabriel, Trans., p. 39)

この夫婦の発話はそれぞれ〈標準アメリカ英語〉に翻訳され、英語翻訳版の読者にこの人物が〈関西弁〉で話すという情報は伝えられない。金水(2018)が指摘するように、原著では、ほんの短い会話を通して、この夫婦が大阪人キャラクターのステレオタイプのひとつ、「けち、守銭奴、拝金主義者」であることをより印象づけるかのように〈関西弁〉が使われている。一方で、英語翻訳では彼らの発話からそのような強い印象は受けないのである<sup>8</sup>。

次に、「クリーム」(2018)に登場する〈関西弁〉話者、「老人」の発話の例とその英語翻訳を考察する。物語は、「神戸で浪人生活を送っている 18 歳の『ぼく』が、学年が一つ下の女の子にピアノの発表会に誘われて会場に行ってみると、それがまったくでたらめであったという出来事について書いている。女の子にかつがれたかと思ひ動転している『ぼく』の目の前に、一人の老人が現れて不思議なことばを関西弁で語りかける」(金水

2020)という設定である。(7)に示すように、「老人」の〈関西弁〉の会話は〈標準アメリカ英語〉に訳されている。

(7) 老人(男性, 神戸出身?) (「クリーム」, 場面: 神戸) “an old man” (Cream)

しばらくそのまま時間が経過した。それから老人が唐突に口を開いた。

「中心がいくつもある円や」

ぼくはまっすぐ顔をあげて、相手の顔を見た。(中略) ぼくが何も言えずにいと、老人は同じ言葉をやはり静かな声で繰り返した。「中心がいくつもある円や」

(中略)

「中心がいくつもあってやな、いや、ときとして無数にあってやな、しかも外周を持たない円のことや」と老人は額のしわを深めて言った。「そういう円を、きみは思い浮かべられるか？」

(中略)

老人はゆっくりと首を振った。「ああ、もちろんや。あたりまえのことや。学校ではそんなことは教えてくれへんからな。ほんまに大事なことはな、学校なんかではまず教えてくれんのや。きみも知ってのとおり」

(村上 2018, pp. 33-34)

Time passed, and then suddenly the old man spoke.

“A circle with many centers.”

I looked up at him. [...] I couldn't say a thing, so the old man quietly repeated the words: “A circle with many centers.”

[...]

“There are several centers—no, sometimes an infinite number—and it's a circle with no circumference.” The old man frowned as he said this, the wrinkles on his forehead deepening. “Are you able to picture that kind of circle in your mind?”

[...]

The old man slowly shook his head. “Of course not. That's to be expected. Because they don't teach you that kind of thing in school. As you know very well.”

(Murakami 2019, Gabriel, Trans., p. 64)

次の(8)は、「ウィズ・ザ・ビートルズ」(2019)に登場する〈関西弁〉話者、「彼女のお兄さん」の発話の例とその英語翻訳である。物語は、「『僕』の初めてのガールフレンドと約束をして彼女の家に行くと、彼女は不在で、彼女の兄しかいなかった。『僕』は彼に誘われて家に上がり、彼に乞われて、持っていた教科書の副読本にあった芥川龍之介の『歯車』を朗読する。ガールフレンドの兄は記憶に関わる病気を持っていて、時折、数時間の記憶がすっぱり抜け落ちるという話を関西弁で『僕』に話す」(金水 2020)という設定

である。(8)に示すように、「彼」の<関西弁>は<標準アメリカ英語>に訳されている<sup>9</sup>。

(8) 彼女のお兄さん(男性, 神戸出身) (「ウィズ・ザ・ビートルズ With the Beatles」, 場面: 神戸) “my girlfriend’s brother” (With the Beatles)

a. 「ええと、君はたぶんサヨコの友だちだよな」、僕が何も言わないうちから彼はそう言った。それからひとつ咳払いをした。眠たげな声ではあったけれど、そこにはいくぶんの好奇心も含まれているように僕には感じられた。

「そうです」、僕は自分の名前を告げた。「十一時にここにかがうことになっていたんです」

「サヨコはいないよ、今」と彼は言った。

「いない」と僕は相手の言葉をそのまま繰り返した。

「うん、どこかに行ったみたいや。うちにはいない」

「でも、今日の十一時にここに迎えに来ると約束をしていたんですが」

「そうか」と兄は言った。(中略)「そうかもしれんけど、でもとにかくこの今、うちの中にはいない」

(村上 2019a, pp. 22-24)

**“I’m guessing you are... Sayoko’s friend?”** He said this before I got a word out. He cleared his throat. His voice was sleepy, but I could sense a spark of interest in it.

“That’s right,” I said and introduced myself. “I was supposed to come here at eleven.”

**“Sayoko’s not here right now,”** he said.

“Not here,” I said, repeating his words.

**“She’s out somewhere. She’s not at home.”**

“But I was supposed to come and pick her up today at eleven.”

**“Is that right?”** her brother said. [...] **“That may be, but the fact is she’s not at home.”**

(Murakami 2020, Gabriel, Trans., p. 76)

b. 「まだ帰ってこないみたいやな。まったく、いったいどこで何をやっているのか」と彼は言った。

それについても僕は何も言わなかった。

「何を読んでいるんや？」と彼は僕の持っている本を指さして言った。

「現代国語の副読本です」

(村上 2019a, p. 28)

**“She isn’t back yet, is she? Where the heck could she have gone off to?”**

I said nothing in response.

**“What’re you reading?”**

“A supplementary reader for our Japanese textbook.”

(Murakami 2020, Gabriel, Trans., p. 78)

例(6)-(8)において、英語の目標テキストは日本語の起点テキストにそれぞれ忠実に翻訳されているのがわかる。原著においては、日本の平均的な読者であれば、これらの登場人物が〈関西弁〉の話者であるということは(特に地の文で明記されていなかったとしても)即座に理解するが、英語翻訳版においては〈関西弁〉による会話が〈標準アメリカ英語〉に翻訳されているため、これらの登場人物が〈関西弁〉(あるいは「非標準変種」)の話者であるという情報は読者に伝えられないままなのである。

### 3.2 タイプ 2

タイプ 2 では、原著における〈関西弁〉の会話が〈標準アメリカ英語〉に翻訳される。一方で、英語翻訳版の読者にも「その人物が〈関西弁〉で話す」という情報が地の文で示されるが、これは原著で地の文にそう書かれていたのがそのまま英語に訳されたためである。「コオロギ」と「木樽」の 2 名の会話の翻訳がこのタイプにあてはまる。まず、(9)において、「コオロギ」が話す〈関西弁〉は〈標準アメリカ英語〉に訳されている。

(9) コオロギ(女性, 大阪出身) (『アフターダーク』, 場面: 東京)

Koorogi (*After Dark*)

「すみません。本名は捨てましてん」とコオロギは関西弁で言う。

(村上 2004, p. 52)

“Sorry about that,” says Koorogi in the soft tones of the Kansai region around Osaka.

(Murakami 2008, Rubin, Trans., p. 37)

「コオロギ」の発話に続く地の文における「関西弁で」の部分(下線部)も訳されている<sup>10</sup>。

次に、「イエスタデイ」に登場する「木樽」の〈関西弁〉の英語翻訳を見てみよう。自身の生育地方言ではない〈関西弁〉を話すということは彼のキャラクター形成にとっても重要な要素であり、(10)に示されるように、そのことは物語の冒頭で言及されている。

(10) 木樽(男性, 東京出身) (「イエスタデイ」, 場面: 東京) Kitaru (Yesterday)

僕の知っている限り、ビートルズの『イエスタデイ』に日本語の(それも関西弁の)歌詞をつけた人間は、木樽<sup>きたる</sup>という男一人しかいない。彼は風呂に入るとよく大声でその歌を歌った。

昨日は／あしたのおとといで

おとといのあしたや

(中略)

木樽は僕の聞くかぎりにはほぼ完璧な関西弁をしゃべったが、(中略)。

(中略)

彼と知り合ったのは、早稲田の正門近くの喫茶店でアルバイトをしているときだった。(中略)

「木樽というのは珍しい名前だよ」と僕は言った。

「ああ、そやな、かなり珍しいやろ」と木樽は言った。

「ロッテに同じ名前のピッチャーがいた」

「ああ、あれな、うちとは関係ないねん。あんまりない名前やから、まあどっかでちょこっと繋がってるのかもしれないけどな」

(村上 2014, pp. 67-68)

As far as I know, the only person ever to put Japanese lyrics to the Beatles song “Yesterday” (and to do so in the distinctive Kansai dialect, no less) was a guy named Kitaru. He used to belt out his own version when he was taking a bath.

**Yesterday**

**Is two days before tomorrow,**

**The day after two days ago.**

[...]

To my ears, Kitaru had an almost pitch-perfect Kansai accent, [...].

[...]

I first met Kitaru at a coffee shop near the main gate of Waseda University, where we worked part time, [...].

“Kitaru is an unusual last name,” I said one day.

“**Yeah, for sure,**” Kitaru replied in his heavy Kansai accent.

“The Lotte baseball team had a pitcher with the same name.”

“**The two of us aren’t related. Not so common a name, though, so who knows? Maybe there’s a connection somewhere.**”

(Murakami 2017, Gabriel, Trans., pp. 41-42)

英語翻訳を原著と比較してみると、木樽が「関西弁で話す」というところも含め、忠実に訳出されているのがわかる。ただし 1 箇所、彼の最初の発話の後、原著では「(と)木樽は言った」(下線部)となっているのに対し、英語版では“**Kitaru replied**” (下線部)に続けて、“**in his heavy Kansai accent**”(波線部)「強い関西弁訛りで」(筆者訳)という加筆が見られる<sup>11</sup>。

### 3.3 タイプ 3

最後のタイプ 3 では、原著における<関西弁>の会話が<標準アメリカ英語>に翻訳される一方で、英語翻訳版の読者に「その人物が<関西弁>で話す」という情報は地の文で示される。ただし、タイプ 2 と異なり、これは翻訳者の判断によって「～方言で言う」

といった内容が加筆されたためである。「三宅さん」1名の会話の翻訳がこのタイプにあてはまる。「鹿島灘の小さな町で、絵を描いて暮らしているという40代の三宅さんは、順子と、同棲相手の啓介をしょっちゅう呼び出して、海岸で焚き火をする。三宅さんは神戸に家族を持つ関西人で、口の悪い関西弁を話す」(金水 2020)という設定である。以下(11)は物語の冒頭部分であり、「三宅さん」の〈関西弁〉の会話は、英語版で〈標準アメリカ英語〉に訳されている。だが、面白いことに、彼の最初の発話の後に続く地の文に、英語翻訳では“Osaka accent”(波線部)が加えられ、「(三宅さんがいつものぼそぼそとした)大阪の訛りで言った」(筆者訳)と、加筆されている<sup>12</sup>。

(11) 三宅さん(男性, 神戸出身) (「アイロンのある風景」, 場面: 茨城県鹿島灘)

Miyake (Landscape with flatiron)

「もう寝てたか？」と三宅さんがいつものぼそぼそとした声で言った。

「だいじょうぶ、まだ寝てないよ」と順子は答えた。

「今、浜にいるねんけどな、流木がけっこうぎょうさんあるねん。大きいやつができるで。出てこれるか？」

「いいよ」と順子は言った。「今から着替えて、十分で行く」

(村上 2000, p. 40)

“Did I wake you?” Miyake asked in his familiar muffled Osaka accent.

“Nah,” Junko said. “We’re still up.”

“I’m at the beach. You should *see* all this driftwood! We can make a big one this time. Can you come down?”

“Sure,” Junko said. “Let me change clothes. I’ll be there in ten minutes.”

(Murakami 2003, Rubin, Trans., p. 22)

上に述べたように、物語にはここに出ている三宅さんと順子の他に、順子の同棲相手である啓介の計3名が登場する。舞台が茨城であることは、(11)の会話の後、三人が「浜」で会って焚き木をしながら会話をする中で次第に明かされていくが、原著の読者は物語のかなり早い段階で、「三宅さんは〈関西弁〉で話すことから関西の出身である。それに対して順子と啓介は〈標準語〉に近い言葉づかいで話すことから、三宅さんとは異なる地域の出身であり、どういう経緯を経てだかはわからないものの、年齢も出身も違う三宅さんと知り合いである」と理解する。それでは、なぜ翻訳者の Rubin 氏は三宅さんの〈関西弁〉の会話を〈標準アメリカ英語〉に訳す一方で、物語の冒頭部分で英語版の読者に「彼が大阪の訛りで話す」ということを知らせる必要があると判断したのか。これは、おそらく、以下(12)に示すように、三人のこの会話の後半で啓介が三宅さん本人に関西弁を話すことについて尋ね、真似をして〈関西弁〉で話すシーンがあるからであろう(下線部)。

(12) 「さあ、ようわからん。俺な、あっちとはもう関係ないねん。昔のことや」

「昔のことやと言われても、そのわりに関西弁ぜんぜん抜けないですね」  
「そうかな、抜けてへんか？ 自分ではようわからんけど」  
「あのね三宅さん、それがもし関西弁やなかったら、わたの喋ってるのはいったいなんですねん。むちやくちやゆわはったら困りますがな」  
「気色の悪い関西弁つかうな。イバラギの人間にけつたいな関西弁つかわれたくないんや。(中略)」 (村上 2000, pp. 47-48)

**“I’m not sure,” said Miyake. “I don’t have any ties with Kobe any more. Not for years.”**

“Years? Well, you sure haven’t lost your Kansai accent.”

**“No? I can’t tell, myself.”**

**“I do declare, you must be joking,” said Keisuke in exaggerated Kansai tones.**

**“Cut the shit, Keisuke. The last thing I want to hear is some Ibaragi asshole trying to talk to me in a phoney Kansai accent. [...]”**

(Murakami 2003, Rubin, Trans., p. 27)

このように、会話の後半で三宅さんの話す<関西弁>が話題にのぼることを考慮に入れると、英語版の冒頭で彼が<関西弁>話者であるという情報を読者に提供しておくのは理に叶っている。また、(12)における啓介のニセ<関西弁>の発話は、英語版ではかなり短縮して訳されており(下線部)、その後ろに地の文を続けて「(啓介は)大げさな関西の訛りで言った」(筆者訳)(波線部)と補われている。“I do declare”というフレーズも、アメリカ南部方言(特に南北戦争以前の南部の女性の話し言葉)とステレオタイプの結びつく表現であることから、これを受けて三宅さんが言う“phoney (Kansai accent)”(「にせの…」)ともうまくつながっている<sup>13</sup>。

#### 4. まとめ

以上のように、村上春樹作品には<関西弁>を話す登場人物が存在し、またその特定の「方言」の使用が彼らのキャラクター形成において重要な役割を担っているのだが、これらの作品の英語翻訳において、彼らの会話に特定の非標準変種が投影されるということではなく、例外なしに<標準アメリカ英語>が使われていることがわかった。これらの人物が<関西弁>(あるいは非標準変種)で話しているという情報は、英語版の読者に伝えられるケースもあれば、伝えられないケースもある。伝えられる場合、その情報は地の文で示され、それは原著の地の文にそう書かれていたのがそのまま英語に翻訳されるタイプと、翻訳者の判断によって「関西方言で言う」といった内容が加筆されるタイプに分かれるのである。後者のタイプでは、物語が進んでいく中で「その人物が<関西弁>を話す」ということを前提に会話がなされるといったようなことが起こる状況をふまえ、物語の整合性の点から、冒頭部分でその人物の<関西弁>の使用について加筆されている。また、同時

にここから何がわかるのかと言うと、本稿で分析の対象とした〈関西弁〉話者 7 名の英語翻訳を見る限りは、彼らの英語の話し言葉に〈標準アメリカ英語〉が使用されているからと言って、翻訳者の判断で、例えば原著の地の文に書かれていた「関西弁で話す」という部分が削除されたり、〈関西弁〉に関わる内容の会話の部分が削除、あるいは修正されたりするということではなく、できるだけ起点テキストに忠実に翻訳されているのである。

それでは、なぜ、これらの〈関西弁〉話者 7 名の英語翻訳に、アメリカで話されている非標準変種が投影されなかったのであろうか。上にも述べたように、〈関西弁〉は日本の関西地方という特定の地域と結びつく言葉づかいであるため、作品が日本語から英語に翻訳された時点でその話し言葉自体が持っていた地域性を失ってしまうのは回避できない。地域変種にはそれぞれ異なる文化的・社会的な特異性が備わっており、例えばアメリカ英語に〈関西弁〉と全く同一の特異性を持つ変種が存在するとは考えにくい。仮に話者のステレオタイプが一致したとしても、日本の関西地方が舞台の物語に登場する人物がアメリカの特定の地域とつながる方言を話すと、読者は違和感を覚えるであろう。この点について、谷崎潤一郎(著)『細雪』(舞台:大阪)を英語翻訳した Seidensticker 氏もまた、「大阪方言は(女性が話すとき特に)上品である」と述べた上で、翻訳した際の〈大阪弁〉の取扱いの問題について以下のように語っている<sup>14</sup>。

An American equivalent came to mind, a form of speech that is both refined and non-standard: the more elegant varieties of Southern speech. It would not do. Sachiko would be ridiculous talking like Scarlett O'Hara – and there we have the main reason that dialect is untranslatable. Scarlett is of Georgia and speaks its language, and Sachiko is from Osaka. (Seidensticker 1993, p. xxii)

アメリカの英語で、これに相当するような上品で非標準的な話し言葉として、[アメリカ]南部で話されている洗練された変種(方言)が頭に浮かんだ。[だが]うまいかないだろう。幸子がスカーレット・オハラのように話したらおかしい。そこに方言が翻訳できない主要な理由がある。スカーレットはジョージアの出身でジョージアの言葉話し、幸子は大阪の出身なのである。(筆者訳)

同様に、村上春樹作品に登場する〈関西弁〉話者は、「イエスタデイ」の木樽を除き関西の出身で〈関西弁〉を話すということを考えると、アメリカの特定の地域と結びつく非標準変種を話すのではなく、特定の地域ともっとも結びつけられにくい〈標準アメリカ英語〉に翻訳するのが安全だったのではないか。原著で特定の話者が〈関西弁〉を話すことによって表現されていた地域性は、地の文における描写や会話の内容の翻訳を通して、ある程度は伝えられるはずである。そして、物語の整合性などの点から、必要に応じて、地の文に「関西方言で話している」と加筆されるのである。

## 5. おわりに

翻訳によって原著で表現されていたいくつかの要素が失われてしまうのは避けられない。特に地域変種は特定の地域と結びつく言葉であるため、翻訳の目標言語で再現するのは難しい。本稿では、ケーススタディとして、村上春樹の小説に登場する〈関西弁〉話者の会話とその英語翻訳を取り上げた。分析の対象となった登場人物の〈関西弁〉の会話には全て無標の〈標準アメリカ英語〉が使用される一方で、起点テキストをできるだけ忠実に訳出しつつ、等価を試みる翻訳者のテクニックと姿勢がうかがえた。

今後は、村上春樹以外の作家の文学作品に観察される地域変種の会話や、言語変種のひとつである「レジスター」の訳出方法などの研究にも取り組んでいきたい。これによって、役割語研究のさらなる発展はもちろんのこと、日本語の文学作品の翻訳の理解と質の向上につながっていくことを期待したい。

### 【謝辞】

本稿を書くにあたり、Philip Gabriel 氏に大変貴重な情報をいただいた。金水敏氏、Dane Hampton 氏にも有益な情報やご助言をいただいた。心より感謝の意を表したい。また、本稿の一部を役割語研究会(大阪大学文学研究科, 2018年7月28日)で発表した際に質問やコメントをくださった聴衆の方がたにもお礼を申し上げる。

### 【著者紹介】

山木戸浩子(YAMAKIDO Hiroko) 藤女子大学文学部英語文化学科准教授。Ph.D. (Linguistics, 2005年)。専門は言語学(特に形態論と役割語研究)。

### 【註】

- 1 「方言」とは、「ある特定の言語に属し、言語的・社会的理由により区別される言語変種のこと」(斎藤・田口・西村(編) 2015)である。「地理的な分布を伴って生じる」「地域方言(regional dialect)」、「仲間内ことば(jargon)、男ことばと女ことば、幼児語、隠語など、社会集団において生じる」「社会方言(social dialect, sociolect)」の二つに大別されるが(p. 206)、本稿で扱う「方言」は前者の「地域方言」を指す。
- 2 ここに挙げた〈老人語〉の語彙・語法の項目(「ワシ」「ジャ」「オル」)の詳細は、金水(編)(2014)『〈役割語〉小辞典』を参照のこと。
- 3 金水(2016)以降、役割語と結びつけられる「人物像」は、金水(2003)の定義に例として挙げられていた「年齢、性別、職業、階層」に加え、居住地域、国籍・民族などの社会的・文化的グループに対応するものに限定されている。また、その知識はその言語共同体の多くの話者によって共有されているものでなければならない(Kinsui & Yamakido 2015も参照)。
- 4 ここに挙げた 6 作品以外に、「ことわざ」(1995)と「ヤクルト・スワローズ詩集」(2019)にも〈関西弁〉話者が登場する。「ことわざ」は、『猿も木から落ちる』ということ

わざのような出来事をユーモラスな関西弁の語り口で綴るショート・ショート」(金水 2020)である。「猿やがな。なんせ猿がおったんや。」(p. 134)と続いていく。「ヤクルト・スワローズ詩集」は東京在住の小説家で、ヤクルト・スワローズ・ファンの「僕」が主人公である。「母親の記憶が次第にあやふやになり、一人暮らしが覚束なくなってきたとき、『僕』は彼女の住まいを整理するために関西に帰った。大きな菓子箱に、阪神タイガースの選手の写真が付いたテレフォン・カードがぎっしり詰め込まれていたので問いただすと、自分が購入したことを真っ向から否定した」(金水 2020)というシーンがあり(村上 2019, p. 57)、「母親」による短い発話 2 つのうちのひとつに〈関西弁〉が観察される(「変なことを言うねえ。そんなもの私が買うわけないやないの」)。この 2 つの作品の英語翻訳版は、現時点(2020年9月22日現在)では出版されていない。

5 その他、「ギョーサン」は郡(1997b)、「テン」「ワ」「ヨー」は郡(1997a)を参照のこと。「ギョーサン」「エライ」などの地域特有の方言語彙は「俚言」と呼ばれる。

6 〈大阪弁〉の「ソラ」は郡(1997b)を参照。

7 〈関西弁〉の「チャウ」は金水(2014)、「カテ」は郡(1997b)、「ドヤ」は郡(1997a)を参照。

8 実際に『海辺のカフカ』を英語翻訳した Gabriel 氏は、「約 15 年も前のことであり、最終稿には私の編集者の修正が入っているため、一語一語の選択が厳密にどこから来ているのかを再現するのはほぼ不可能だけれども」と前置きをした上で「この夫婦の発話を英語に訳す際に、おそらく、彼らがどこの出身なのかということよりも、彼らの年齢をより考慮に入れたのでは？」ということである(2018年6月26日私信)。上に述べたように、彼らは旅行をし、図書館の建物のツアーに参加するような時間と関心を持っていることがうかがえるため、「少し裕福で年輩である印象を持ったのかもしれない」と言う。「奥さん」の発話の英語訳に使われている“fetch”や“hefty”は、年輩の女性が使用する語として適切であり、一方で「夫」の「ほんまに、ほんまに」には大阪らしさが強く感じられるため、Gabriel 氏自身の大阪人に対する「より率直で、やや大きな声で話し、積極的に物怖じしない」というイメージから、「彼の発話にはよりくだけた印象を与えるように訳出するのが最適だと思った」とのことである(ibid.)。

9 「僕」の話す〈標準語〉と「彼女のお兄さん」(=「彼」)の話す〈関西弁〉は、どちらも〈標準アメリカ英語〉に訳されているものの、「彼」はより“casual”に話す印象を受ける。実際に、翻訳を手がけた Gabriel 氏は意図的にそう訳したと言うが、これは二人の話し言葉の「レジスター」の違いから来ており(具体的には、「僕」は敬語を使い、「彼」はくだけた非丁寧体で話す)、「彼」の〈関西弁〉の使用とは関係がない。「レジスター」とは、「職場語や法廷のことばなど、特定の集団や場面に関わる言語変種」(斎藤・田口・西村(編)2015, p. 207)のことである。年上の「彼」とはこれが初対面で、「僕」は彼女の不在中に家を訪ね、「彼」に應對されている。自分の家でくつろいで話す「彼」に対し、「僕」は緊張してかじこまっております、二人のこういった立場の違いや状況も翻訳に反映されているのである(P. Gabriel 氏, 2020年3月4日私信)。

物語の終盤で、二人は 18 年後に偶然東京で再会する。「彼」が「僕」を呼び止めたとき、「言葉のイントネーションは間違いなく関西のものだった」と、初めて地の文で「彼」が〈関西弁〉話者であると言及されるが(村上 2019a, p. 38)、英語版ではこの部分もそのまま訳出されている。“He had an unmistakable Kansai intonation.” (Murakami 2020, p. 81)

10 (9)における〈関西弁〉の会話に続く「…とコオロギは関西弁で言う」の英語翻訳で、翻訳者の Rubin 氏は、“soft (tones of …)” (波線部)「穏やかな(話し方で)」(筆者訳)と加えている。関西弁は(男性の漫才師やお笑い芸人を想像してみても)大きな声で面と向かってぶしつけに話すステレオタイプのイメージを持つが、(9)の話者は女性であるため、ここに“soft”が足された可能性があると言う(P. Gabriel 氏のご教示による, 2019 年 9 月 14 日私信)。

11 「イエスタデイ」の木樽の〈関西弁〉は〈標準アメリカ英語〉に訳されているが、彼のキャラクター形成において〈関西弁〉を話すということはとても重要な要素であるため、翻訳をした Gabriel 氏は当初自分で「方言」を作り、木樽の話し言葉に使うことを試みたと言う(2018 年 6 月 26 日私信)。その「方言」は、アメリカ東海岸(ボストン南部とブルックリン辺り)の“punkish guy”(不良・非行少年)が使いそうな言葉づかいを組み合わせで作られた。以下(i)に例を示す(P. Gabriel 氏, 2019 年 9 月 14 日私信)。

- (i) a. 昨日は／あしたのおととい **Yes'erday,**  
**Is two days 'fore t'morrow,**  
 おとといのあしたや **The day af'er two days ago.**
- b. 「ああ、そやな、かなり珍しいやろ」と木樽は言った。  
**“Yeh, fer sure,”** Kitaru replied in his typical heavy accent.
- c. 「ああ、あれな、うちとは関係ないねん。あんまりない名前やから、まあどっかでちょこっと繋がってるかもしれんけどな」  
**“Yeh, but dat guy and me aren't rela'ed. Not so common a name, tho, so who knowz, maybe der's a connection s'mewhere downa line.”**

(10)と比較をしてみると、“th” [ð] の代わりに“d”が使われていたり(e.g. “dat”; cf. “that”)、子音や母音が脱落していたり(e.g. “yes'erday”, “t'morrow”)、非標準的なスペルも用いられている(e.g. “fer”; cf. “for”)。この試みの過程について、Gabriel 氏は以下のように述べている。

I thought using only one of them ([those dialects]) for Kitaru would not be good, since the reader would have a mental image of that specific area in the US—I didn't want readers to read Kitaru's speech and picture him in one specific US region; instead I wanted readers to get an image more of

personality traits and character that I associate with Osaka through a combination of US dialects. I hope that makes some sense. In the end, though, my editor preferred not to have Kitaru speak in a very unusual way, and the author agreed. (2018年6月26日私信)

At first I was disappointed that my editor, and the author, both wanted to dial this back—essentially follow the rule I laid out above of simply indicating by comments (He said in his distinctive Kansai accent) that something's unique about a person's speech, rather than trying to reproduce it. But now that I think of it, I'm glad we dialed it back. But it is frustrating—as with some humor—to not be able to fully capture something distinctive in the original in the translation. (2019年9月14日私信)

参考までに、(i)の英語翻訳に見られるように、「小説で示される方言は、読者にそれとわかる程度に方言的要素を選択的に提示すること」が多く、「このフィクション特有のスタイルは、目で読む方言という意味で視覚方言(eye dialect)と呼ばれる」(山口 2007, p. 13)。英語圏のフィクションにおける「視覚方言」の使用の例は、山口(2007)を参照。

<sup>12</sup> 三宅さんは神戸の出身であるという設定だが、彼が話す〈関西弁〉には「神戸らしい特徴」は見られず、「大阪風関西弁としか言えない」(傍点は引用者による)とのことである(金水敏氏, 2018年7月2日私信)。「より authentic な関西弁(大阪味)」にするなら、例えば(11)の「いるねん」は「いてるねん」、(12)の「つかわれたくないんや」は「つかわれたないねん」の方がベターであると言う。

<sup>13</sup> D. Hampton 氏のご教示による(2018年7月11日私信)。

<sup>14</sup> ガウバッツ(2007, p. 126)も参照。

#### [資料文献]

- Murakami, H. (2003). *Landscape with flatiron* (J. Rubin, Trans.). *After the Quake*. London: Vintage.
- (2005). *Kafka on the Shore* (J. P. Gabriel, Trans.). New York: Alfred A. Knopf.
- (2008). *After Dark* (J. Rubin, Trans.). London: Vintage.
- (2017). *Yesterday* (P. Gabriel, Trans.). *Men without Women* (pp. 41-76). London: Vintage.
- (2019). *Cream* (P. Gabriel, Trans.). *The New Yorker*, January 28, 2019 Issue: 60-65.
- (2020). *With the Beatles* (P. Gabriel, Trans.). *The New Yorker*, 95<sup>th</sup> Anniversary Issue (February 17 & 24, 2020): 72-82.

- 村上春樹 (1995) 「ことわざ」『夜のくもざる』(pp. 133-137) 平凡社  
—— (2000) 「アイロンのある風景」『神の子どもたちはみな踊る』(pp. 39-66) 新潮社  
—— (2002) 『海辺のカフカ <上>』 新潮社  
—— (2004) 『アフターダーク』 講談社  
—— (2014) 「イエスタデイ」『女のいない男たち』(pp. 65-116) 文藝春秋  
—— (2018) 「クリーム」『文學界』第 72 巻第 7 号: 24-37. 文藝春秋  
—— (2019a) 「ウィズ・ザ・ビートルズ With the Beatles」『文學界』第 73 巻第 8 号:  
9-44. 文藝春秋  
—— (2019b) 「ヤクルト・スワローズ詩集」『文學界』第 73 巻第 8 号: 45-63. 文藝春  
秋

[参考文献]

- Colina, S. (2015). *Fundamentals of Translation*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Kinsui, S., & Yamakido, H. (2015). Role language and character language. *Acta Linguistica Asiatica*, 5(2): 29-41. <https://doi.org/10.4312/ala.5.2.29-42>
- Seidensticker, E. G. (1993). Introduction. In J. Tanizaki, *The Makioka Sisters* (pp. ix-xxiii). London: David Campbell Publishers.
- ガウバツ・トーマス・マーチン (2007) 「小説における米語方言の日本語訳について」  
金水敏(編)『役割語研究の地平』(pp. 125-158) くろしお出版
- 平子義雄 (1999) 『翻訳の原理—異文化をどう訳すか』 大修館書店
- 金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』 岩波書店  
——(編) (2014) 『<役割語>小辞典』 研究社  
—— (2016) 「役割語とキャラクター言語」 金水敏(編)『役割語・キャラクター言語研究  
国際ワークショップ 2015』(pp. 5-13) (私家版) 大阪大学大学院文学研究科  
—— (2018) 「キャラクターとフィクション言語—宮崎駿監督のアニメ作品, 村上春樹の  
小説をケーススタディとして」 定延利之(編)『「キャラ」概念の広がりと深まりに向けて』  
(pp. 64-83) 三省堂  
—— (2020) 「「関西人」村上春樹」『東京六稜倶楽部』講演要旨(オンライン, 2020  
年 9 月 19 日)
- 金水敏・田中ゆかり (2019) 「第 9 回 V 時代語@時代ならびに翻訳 新春特別対談編」  
『<役割語>トークライブ!』(研究社 WEB マガジン *Lingua*) [Online]  
<http://www.kenkyusha.co.jp/uploads/lingua/prt/18/yakuwari1901.html> (2020  
年 3 月 15 日)
- 金水敏・田中ゆかり・岡室美奈子(編) (2014) 『ドラマと方言の新しい関係—『カーネーション』から『八重の桜』、そして『あまちゃん』へ—』 笠間書院
- 郡史郎 (1997a) 「総論」 平山輝男(編)『大阪府のことば』(pp. 1-61) 明治書院

—— (1997b) 「俚言—大阪市特有のことばと、その使用実態」 平山輝男(編)『大阪府のことば』(pp. 193-213) 明治書院

村上春樹(1986)「関西弁について」村上春樹・安西水丸(著)『村上朝日堂の逆襲』(pp. 22-25) 朝日新聞社

斎藤純男・田口善久・西村義樹(編)(2015)『明解言語学辞典』三省堂

田中ゆかり(2011)『「方言コスプレ」の時代 ニセ関西弁から龍馬語まで』岩波書店

山口治彦(2007)「役割語の個別性と普遍性」金水敏(編)『役割語研究の地平』(pp. 9-25) くろしお出版

山木戸浩子(2018)「日本語の文学作品における言語変種の英語翻訳—村上春樹(著)『海辺のカフカ』ナカタさんの話し言葉から考える—」『通訳翻訳研究への招待』19: 1-21. 日本通訳翻訳学会

吉田理加・坪井睦子(2013)「社会言語学」鳥飼玖美子(編)『よくわかる翻訳通訳学』(pp. 166-167) ミネルヴァ書房

洋泉社編集部(編)(2013)『増補改訂版 村上春樹 全小説ガイドブック』洋泉社